

研究ノート

光明皇后の造営事業と造瓦ノート (4)  
新薬師寺の創建瓦

次 山 淳

富山大学人文科学研究第 78 号抜刷

2023年3月

# 光明皇后の造営事業と造瓦ノート（4） 新薬師寺の創建瓦

次 山 淳

## はじめに

この一連の作業では、奈良時代の平城京周辺でおこなわれた造営事業を、歴史考古学の方法を通じて構造的に捉えていくための視点として、光明皇后（701～760）により行われた造営事業を、造瓦を中心に整理・検討していくことを目的としている。

光明皇后あるいはその家政機関である皇后宮職の関与が指摘されている造営事業を、地理的な位置と所用瓦のありかたから整理すると、A：藤原不比等邸宅地、平城京・皇后宮、法隆寺東院、恭仁京・皇后宮、法華寺、B：興福寺五重塔、興福寺西金堂、新薬師寺、C：東大寺上院地区、東大寺、の3つのグループに分けることができる。

基礎的な作業としては、個々の造営事業とそれともなう造瓦に関する史・資料および先行研究を整理し、軒瓦の系統性から各グループ内での事業相互のありかた、そしてグループ間のありかたを時間的・空間的に確認していくことになる。

本稿では、Bグループに属する新薬師寺の創建瓦とその生産地と見られる荒池瓦窯2011年度調査地点について、近年の調査研究成果を整理する。

## 1 新薬師寺の創建

新薬師寺は、春日山麓の西南、奈良県奈良市高畑町に所在する。新薬師寺の創建年次を伝える確実な史料はないが、12世紀初頭に編纂された『東大寺要録』巻第一・本願章に、天平19年（747）3月、仁聖皇后（光明皇后）が、聖武天皇の病氣平癒を祈って建立し、七仏薬師像を造立したと記されていること<sup>1)</sup>、

（天平）十九年丁亥三月。仁聖皇后。縁天皇不豫。立新薬師寺。并造七仏薬師像。

また、天平20年（748）7月7日の「経疏奉請帳」（『大日本古文書』10-285）以降、『続日本紀』や「正倉院文書」の中に新薬師寺の名がみられるようになることから、その創立は天平19年頃とされている。

『東大寺要録』巻第六・末寺章には、新薬師寺はまたの名を香薬寺といい、九間の仏殿には七仏浄土七軀が祀られていたとある。西川新次は、同書巻第一・本願章に収める「延暦僧録文

仁政皇后菩薩」に、皇后が金堂と東西楼榭をもつ香山寺と、香葉寺の九間仏殿・七仏浄土七軀・東西両塔・鐘一口などを造ったことが記されており、末寺の章はこれによったものとみている。

新薬師寺の中心堂宇が正面九間の仏殿であったことは、正倉院蔵の「東大寺山堺四至図」（天平勝宝8年（756））に記載された「新薬師寺堂」と注記のある単層七間の一堂からもうかがわれる<sup>2)</sup>。同図に記載された「新薬師寺堂」の位置は、現在の奈良教育大学の北辺にあたる。当時の新薬師寺には、金堂・東西両塔に加え、壇所または壇院、薬師悔過所、政所院、温室、造仏所あるいは造丈六像所が存在していた。新薬師寺の総供養が行われたのは、宝亀3年（772）正月であった（「北倉代中間下帳」『大日本古文書』16-591）。なお、七仏薬師堂（金堂）は、応和2年（962）8月30日の大風で、倒壊したことが知られている（『日本紀略』同日条）。

## 2 新薬師寺金堂の発掘調査と創建瓦

### (1) 新薬師寺金堂の発掘調査

新薬師寺に対する考古学的な知見の乏しい中、2008年～2011年にかけておこなわれた奈良教育大学構内北東部の発掘調査において、七仏薬師堂（金堂）に相当するとみられる大型基壇建物跡が確認された<sup>3)</sup>。

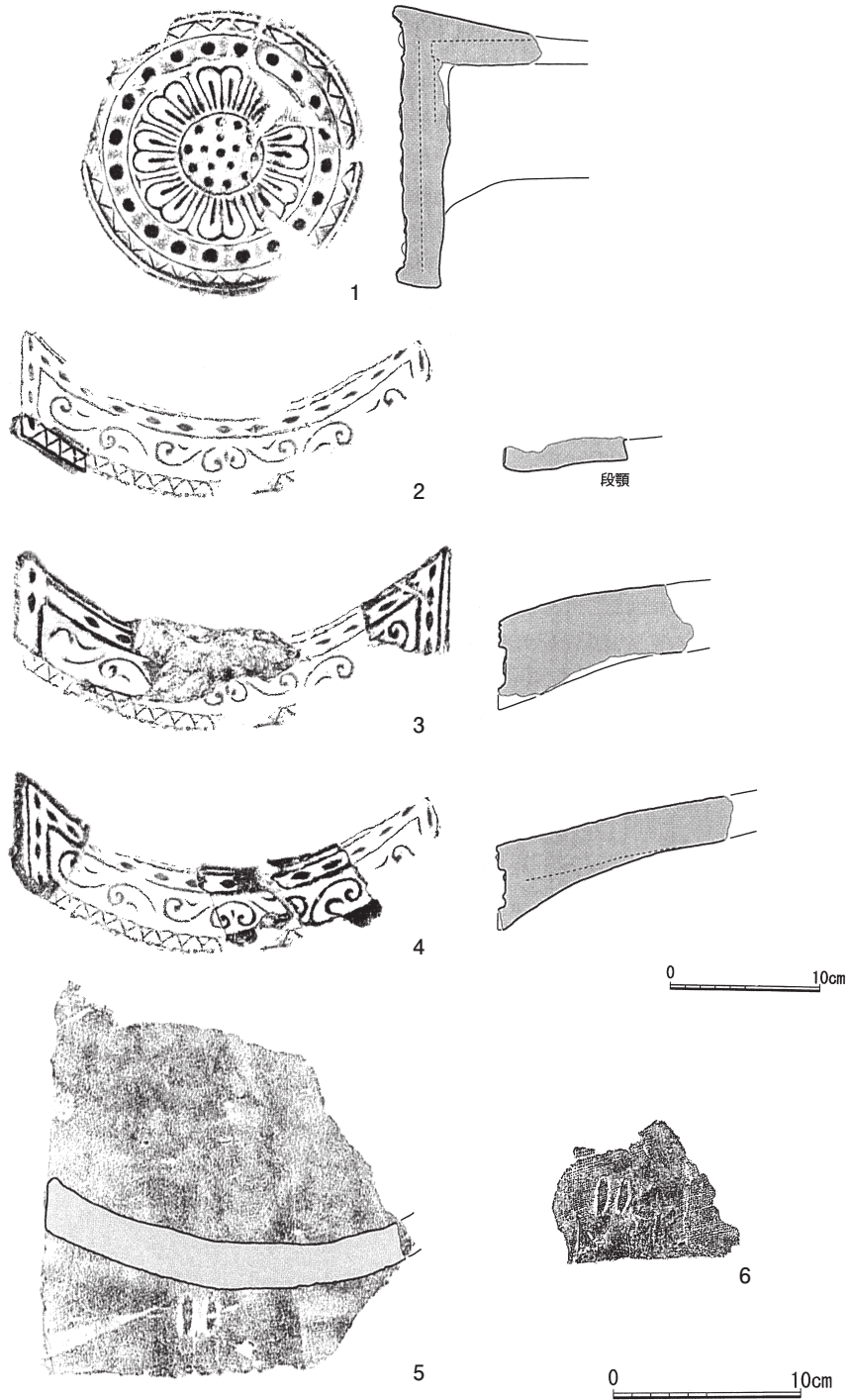
大型基壇建物SB001の平面規模は、基壇幅東西約68m、基壇高約2m、身舎は桁行11間×梁行2間あるいは3間で、身舎の四周に廂のつく桁行13間（約60m）、梁行4間あるいは5間の礎石建物であったと推定されている。基壇の外装は凝灰岩の切石による壇正積基壇で、南面に幅約52mの長大な階段がつく構造であることが判明した。また、基壇上では礎石の据付掘形7基が確認されている。

### (2) 新薬師寺金堂の創建瓦

出土瓦の検討から、新薬師寺金堂の創建軒瓦およびこれらにともなう丸・平瓦は、興福寺式軒丸瓦6301型式I種、軒平瓦6671型式J種<sup>4)</sup>、および報告書分類の丸瓦I類・平瓦I類であると考えられた。

興福寺式軒丸瓦6301型式は、複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、間弁が独立するA系統。外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に大ぶりの珠文を配す。1996年の『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』<sup>5)</sup>では、A・B・C・D・E・F・I・J・Lの9種が登録されている<sup>6)</sup>。

興福寺式軒平瓦6671型式は、三回反転均整唐草文軒平瓦。中心飾りは分離した下向きC字形の中心葉の中に紡錘形の小葉を配したもので、中心葉の巻き込みと組み合せて下から派生する三葉文を表現する。上外区と左右脇区に杏仁形珠文、下外区に線鋸歯文を配する。



第1図 新薬師寺創建軒瓦・平瓦凹面「八」字状痕跡

1: 6301H 2~4: 6301J 5: 新薬師寺 6: 荒池瓦窯

『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』では、A・B・C・D・E・I (Ia・Ib)・J・K・L・Mの10種が登録されている<sup>7)</sup>。唐草文の各单位が、2葉構成のもの(A・E・J・L)と3葉構成のもの(B～D・I・K)がある。

報告書では、出土軒瓦のうち最も古式の興福寺式軒丸瓦6301Iが20点(53%)、興福寺式軒平瓦6671Jが15点(31%)、および6663Aが1点(2%)あり、出土点数は少ないものの興福寺式の組み合わせが出土軒瓦の3割から5割を占めることから、金堂創建期所用瓦とされた。

また、これと組み合う丸・平瓦は、丸瓦I類61.7%、平瓦I類63.6%で、出土丸・平瓦の6割以上を占める。これらは、胎土・焼成・色調も一致することから、同一瓦屋の製品とみられ、新薬師寺金堂創建期には、軒丸瓦6301I・軒平瓦6671J、丸瓦I類・平瓦I類が主体的に用いられたと考えられた。以下では、報告書の観察記述に沿ってその特徴をみていく。

**6301I** 複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房の蓮子は1+5+10、中房周縁に突線がめぐり、蓮弁が盛り上がり、弁端の反りが弱く弁の先端が横方向に広がる点が特徴的である。外区内縁に大ぶりの珠文を配し、外区外縁は線鋸歯文、頂部には沈線がめぐり(第1図1)。

出土した瓦の製作は接合式で、丸瓦広端部凹面側を片刃状に削る。丸瓦の接合線は円弧状を呈し、内面接合部を横方向にナデつける。瓦当裏面から丸瓦接合部にかけては縦ナデ、瓦当裏面はユビオサエののち不定方向のユビナデ、瓦当裏面下半部は周縁に沿ってヘラケズリする。瓦当裏面に布目圧痕は認められない。范型に2層から3層に分けて粘土を詰めており、文様面が薄く剥離した資料が多い。丸瓦部凸面は丁寧なヘラケズリ。側面に範端痕を残す。焼成は堅緻で青灰色を呈するものと、やや軟質で灰色・灰白色・灰黄色を呈するものがあり、後者が多い。

**6671J** 3回反転均整唐草文軒平瓦。中心飾りは、下向きC字形の中心葉の中央に紡錘形の小葉を配したもので、向って左側の中心葉が大ぶりに表現されることに特徴がある。唐草の各单位が、主葉と第1支葉の2葉構成をとる。上外区と左右脇区に杏仁形珠文、下外区に線鋸歯文を配する。左脇区下端の杏仁形珠文を斜位に置く点に特徴がある。外縁上面に範端痕を残す。

調査では、段顎と曲線顎のものが出土したが、段顎のものは1点のみ(第1図2)。段顎のものは、顎部長8.5cmで顎部を横ヘラケズリしたのち横ナデ、段部は横ナデする。顎の剥離面に糸切り痕を残すことから、粘土板顎貼付け式。破片のため、他の部位の調整および平瓦部の状況は不明。

曲線顎のもの(第1図3・4)の平瓦部は、模骨痕、粘土板糸切り痕を残すことから、粘土板桶巻作り。平瓦部凸面と側面は縦ヘラケズリしたのち縦ナデし、側縁部を面取りする。平瓦部凹面は瓦当寄りを横ヘラケズリし、一部縦ナデで布目圧痕を擦り消す。焼成は堅緻で青灰色を呈するものと、やや軟質で灰色・灰白色・灰黄色を呈するものがあり、後者が多い。

**丸瓦I類** 玉縁式丸瓦。凸面は、縦縄叩きののち横ナデで縄目を擦り消す。横ナデをしたのち、縦ナデを加えるものもある。玉縁部凸面は縦縄叩きののち段部との境を横ナデして縄目を

擦り消す。玉縁部凸面は狭端縁と両側縁を面取りすることを基本とするが、狭端縁の面取りを省略するものもある。凹面は、布目圧痕と布綴じ合わせ痕を残す。側面はヘラケズリし、胴部凹面の両側縁と広端縁を面取りする。玉縁部凹面は、両側縁と狭端部を面取りすることを基本とし、加えて側面と段部との境に面取りするものもある。焼成は堅緻で青灰色を呈するものと、やや軟質で灰色・灰白色・灰黄色を呈するものがある。

**平瓦Ⅰ類** 平瓦は、桶巻作りによるものをⅠ類、一枚作りによるものをⅡ類とし、調整手法の特徴から細分する。

Ⅰa類は、凸面全面に縦縄叩きし、凸面の狭端側4分の1あるいは3分の1程度を横ナデして縄目を擦り消す。凹面全面に模骨痕と布目圧痕を残し、一部縦ナデにより布目を擦り消す。模骨痕の幅は、1.8～2.2cmをはかる。左右両側面と端面はヘラケズリし、凹面両側縁に面取りするのが基本であるが、加えて凸面側の側縁に面取りするものもある。狭端・広端縁に面取りはおこなわない。焼成は堅緻で青灰色を呈するものと、やや軟質で灰色・灰白色・灰黄色を呈するものがある。

Ⅰb類は完形に復元できる資料はない。凸面全体に縄叩きし、凹面に模骨痕と布目圧痕を残す。確認できる資料で凸面に二次的な調整を加えるものはない。模骨痕の幅は、1.8～2.3cmをはかる。側面・端面はヘラケズリするが、凹面両側縁と狭端・広端縁には面取りはおこなわない。焼成は、やや軟質で灰色・暗灰色を呈する。

### 3 荒池瓦窯 2011 年度調査地の成果

荒池瓦窯は、奈良市高畑町、荒池北岸の南に下がる傾斜地に立地する。「東大寺山堺四至図」に記載された「瓦屋」にあたとみられ<sup>8)</sup>、これまでも瓦が採集されてきた。2011年におこなわれた個人住宅改築にともなう調査で、奈良時代の瓦窯にともなう灰原が検出され、多量の瓦類が出土した<sup>9)</sup>。

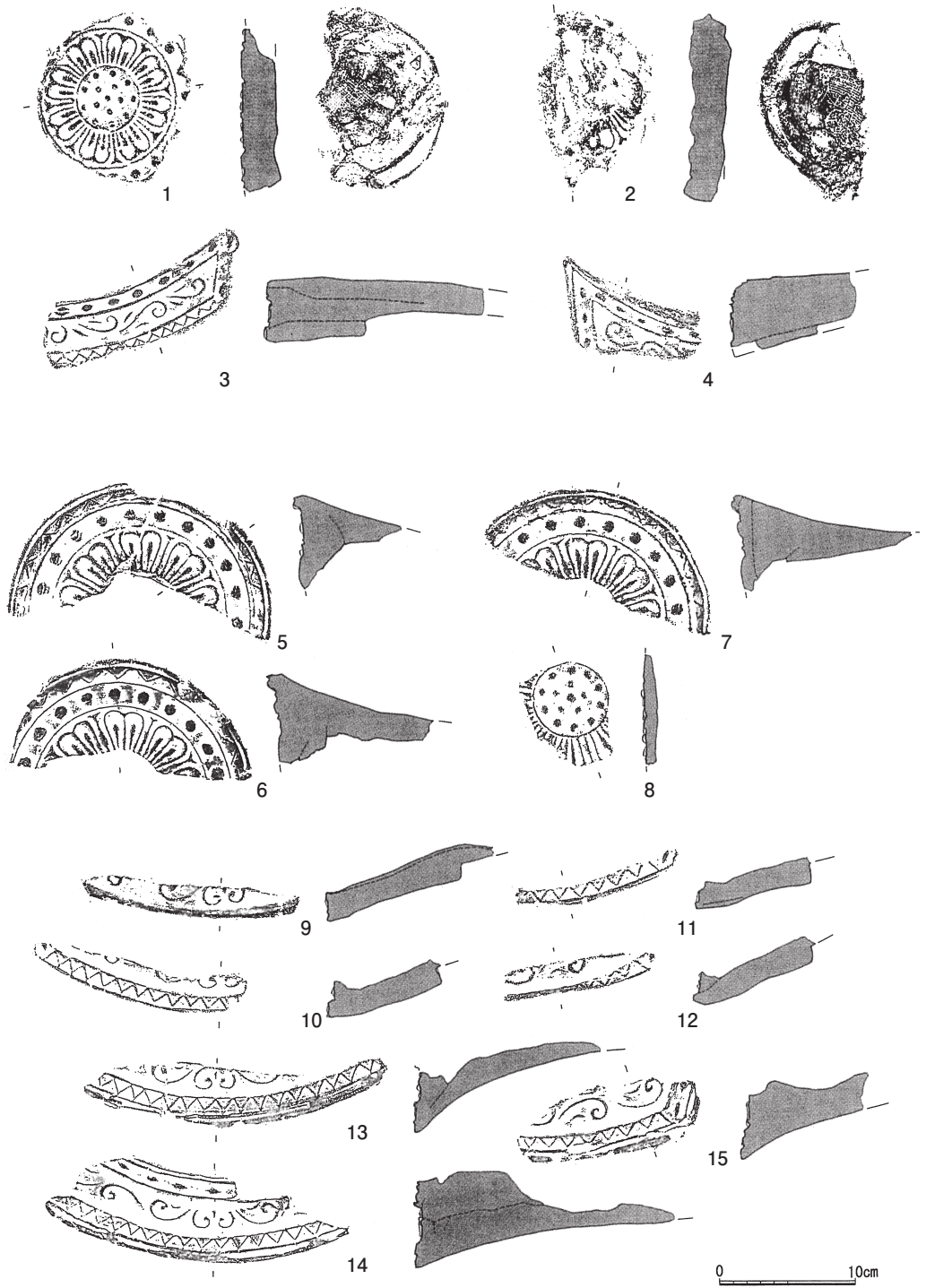
灰原と表土から出土した軒丸瓦はすべて興福寺式6301型式であり、B種とⅠ種がある。

**6301B** 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房の蓮子の数が1+5+9。珠文に対して中房の蓮子が極端に小さい。中房周縁に突線はない。外区の鋸歯文の先端の角度が鈍角で、外縁頂部には沈線がめぐる。

第2図1では間弁の付け根に1箇所、弁端と内区と外区を分ける圏線の間に1箇所、外区珠文と外縁との界線の間に1箇所、計3箇所の範傷が認められる<sup>10)</sup>。瓦当裏面には、布目押圧の痕跡が残り、その周辺にはナデが施されて布目が消されている。丸瓦部の取り付け位置は、瓦当上部であり、裏面の剥離状態から丸瓦は無加工で取り付けられていた。

**6301Ⅰ** いずれも瓦当部分の破片であり、全体が残存しているものは出土していない（第2図5～8）。また、丸瓦部との接合部分にあたる瓦当上部の破片が多数を占めることに特徴が





第2図 荒池瓦窯 2011年調査出土軒瓦

1・2 : 6301B 3・4 : 6671B 5～8 : 6301I 9～15 : 6671J

ある。瓦当下部の破片では、裏面にユビオサエがおこなわれている。いずれも瓦当面に範傷は認められない。瓦当端部に横ナデまたは横ケズリ、丸瓦部凸面側に縦ナデまたは縦ケズリを施す。また、瓦当面端部には、範の被りによって生じたと考えられる段のあるものがある。接続する丸瓦部は、瓦当裏面での剥離状態から筒部端面の凹面側を面取りして加工し、瓦当部と接合されていたようであるが、無加工のものもある。丸瓦部との取り付けは、瓦当上部に位置するものと瓦当下部に位置するものがある。

灰原と表土から出土した軒平瓦は、すべて興福寺式6671型式であり、B種とJ種がある。

**6671B** 3回反転均整唐草文軒平瓦。唐草の単位が、主葉と第1・第2支葉の3葉構成をとる。杏仁形の珠文を上外区に14、左右両脇区に3、下外区には線鋸歯文を24.5配す。

出土した6671Bには、顎形態に段顎のものと曲線顎のものがある。段顎のものは、粘土板の貼り付けによって作られている（第2図3）。顎の凸面には強い横ナデまたは横ケズリ、瓦当凹面端部には横ケズリ後にナデが施される。平瓦部凸面には縦縄叩き後に横ナデ、凹面には側板と布目痕跡がのこり、縦ナデによって、それぞれ縄目・布目の一部が消されている。右側面は縦ケズリにより調整される。上外区には、木目とみられる範傷が5箇所認められる。凹面側の剥離面に粘土板の糸切り痕が認められるものがある。

曲線顎のものは、瓦当凹面端部から平瓦部凹面には縦ナデが施される（第2図4）。側面に縦ケズリ。内区左上隅には、斜めにのびる範傷が認められる<sup>11)</sup>。

**6671J** 出土した6671Jは、そのほとんどが下外区の破片である。その多くは顎面であり、顎を作り出した際に貼り付けられた粘土板とその接合部分で剥離したものである。顎形態に段顎のものと曲線顎のものがある。

段顎のものは、粘土板の貼り付けによって作られる（第2図9～12）。顎凹面側の剥離面には粘土板の糸切り痕が残る。顎凸面は縦縄叩き後に横ナデによって縄目が擦り消されている。瓦当端部には、横ナデを施すものと横ケズリを施すものがある。瓦当部側面はケズリ調整。なお、下外区が切り取られているものがある。

曲線顎のものは、上下の瓦当端部に横ナデあるいは横ケズリ、顎から平瓦部凸面にかけては縦ナデ、側面にケズリが施される。また、下外区外縁の沈線がところどころ潰れているものがあるが、その中には痕跡がほぼ同一の位置に認められるものがある（第2図13～15）。

**丸 瓦** 玉縁式丸瓦である。いずれも玉縁部が先すぼまりの形状となる。調整は、凸面に縦縄叩き後に横ナデが施されており、凹面は未調整で布目痕跡が残り、綴合わせの認められるものもある。端部は、筒部両側面の凹面側と玉縁部端面の凹面側、玉縁部両側面の凸面側が共通して面取りされるが、筒部端面は凹面側が面取りされるものと、面取りされないものがある。成形方法は、成形痕跡や調整から、粘土板模骨巻作り。

**平 瓦** 調整は凸面では縦縄叩きの後に、狭端から全体の約4分の1の範囲または2分の1



の範囲に横ナデが施されるが、広端側にユビオサエの残るものがある。凹面は未調整で、側板および布目や糸切りの痕跡が残るが、狭端から幅1～2cmに横ナデが施されたものがある。端部はいずれも両側面の凸面側を面取りし、狭端と広端側の端面は面取りされていない。成形方法は、成形痕跡や調整から、粘土板桶巻作り。

この他に、南都七大寺式鬼面文鬼瓦I式B1が出土している。

#### 4 新薬師寺および荒池瓦窯 2011 年度調査地点調査成果からの考察

##### (1) 新薬師寺報告における考察

新薬師寺創建軒瓦が630II・667IJであることと、荒池瓦窯2011年度調査地点出土瓦が同範関係にあることが判明したことをふまえて、新薬師寺報告書の考察では、大きく以下の3点について考察された<sup>12)</sup>。

##### A 新薬師寺と荒池瓦窯 2011 年度調査地点との関係

- ① 軒丸瓦630IIの丸瓦部凹面広端側を片刃状に削る手法、軒平瓦凸面の調整手法の一致。
- ② 軒平瓦667IJの顎形態に段顎と曲線顎の2種が存在し、平瓦部は桶巻作りによること。
- ③ 平瓦は粘土板桶巻作りで、凸面の狭端側3分の1から4分の1程度を横ナデして縄目を擦り消すこと。

などの特徴の一致から、新薬師寺金堂所用瓦は荒池瓦窯で生産された可能性がきわめて高い。一方ですでに指摘されているように<sup>13)</sup>、東大寺出土品も荒池瓦窯で生産されたのであろう。

##### B 技術変遷史からみた位置づけ

新薬師寺出土の667IJの顎形態には、段顎と曲線顎の2種が存在する。平城宮軒瓦編年に照らすと、曲線顎は第Ⅱ期後半(729～744)に表れ、段顎と交替しながら、第Ⅲ期(745～756)には段顎が見られなくなるとされており<sup>14)</sup>、この年代観をふまえれば、出土した667IJが曲線顎主体であることから、第Ⅱ期末～第Ⅲ期前半(745～749)にかけての製品と想定することができる。

667IJの平瓦部がいずれも一枚作りにくらべて古式の桶巻作りで製作されている点に注目すると、第Ⅲ期前半を大きく下るとは考えがたい。630IIも同時期であろう。この年代観は、文献史料による年代観とおおむね矛盾しない。

##### C 供給地としての東大寺との関係

630II-667IJを生産した可能性の高い荒池瓦窯2011年度調査地点灰原にともなう瓦窯が、新薬師寺造営を契機に生産を開始したのか、東大寺のある堂舎を契機に生産を開始したのかは、現段階では不明だが、東大寺出土630IIには摩耗がほとんど見られない個体と、摩耗が著しく、製作技法上の退化傾向が見られる個体も存在するとされ、長期にわたり継続的に使用されたと考えられている<sup>15)</sup>。

一方、新薬師寺金堂出土品には、範傷が顕著なものや範が摩耗した段階のものは確認できず、初期段階の製品が新薬師寺で使用されたと考えられる。現状では、東大寺においてこの組み合わせを主体的に使用した堂舎が確認できないのに対し、新薬師寺では丸・平瓦を含めて一括した組み合わせのもとに使用されていることから、6301I-6671Jは当初から新薬師寺金堂所用に製作された軒瓦であった可能性も考えられる。

## （２） 荒池瓦窯 2011 年度調査地点出土資料に対する考察

荒池瓦窯跡の供給先について、報告者である渡辺和仁は、候補として東大寺をあげ、天平勝宝8歳（756）の造東大寺司が興福寺三綱務所に造瓦を依頼した史料「造東大寺司牒興福寺三綱務初」（『正倉院文書』）の存在や、『造興福寺記』に「東大寺講堂の瓦を焼いた瓦窯」であったという伝承の記載のあること、同範品が既往の調査で確認されていることから、東大寺の中でも講堂に使用された可能性を指摘した<sup>16)</sup>。

一方で、出土した平瓦がすべて粘土板桶巻作りという古い製作技法によって作られていることから、確認した灰原にともなう瓦窯の操業年代が、東大寺造営よりも遡る可能性も考慮する必要があるとする。調査では、6301B-6671Bが少数出土したが、これらは東大寺前身寺院の所在候補地である東大寺丸山西遺跡の主要軒瓦型式の一つと考えられており<sup>17)</sup>、灰原出土瓦の年代を奈良時代前半頃の中でも東大寺創建以前に位置づければ、丸山西遺跡も供給先の候補地として検討する必要があるとした。

また、新薬師寺金堂出土瓦の検討を受けて、瓦屋の立地としての荒池瓦窯の成立の契機については、2011年度地点灰原出土瓦と同範例の検討、梅谷瓦窯からの工人移動の問題、文献史料および「四至図」における「瓦屋」表記の解釈、同範品の出土寺院の成立・造営経緯を踏まえた検討、さらに供給先についても複数ある蓋然性が高いとみられることから、公的性格を帯びていた瓦窯である可能性を検討する必要性を指摘している<sup>18)</sup>。

岩永省三は、東大寺正倉院正倉に葺かれていた桶巻作り平瓦を検討し、その製作技術に、凸面狭端側に縄叩き目の擦り消しを施し、広端側に掌・指による圧痕を残すという特徴があることを明らかにした<sup>19)</sup>。さらにその類例を探り、製作地を荒池瓦窯2011年度調査地に求めた。この平瓦にともなう軒瓦6301I-6671Jを視点を、製作年代と正倉院への供給の経緯についても検討を加えている。

新薬師寺報告で文字瓦とされた平瓦凹面における「ハ」字状痕跡（第1図5）が、荒池瓦窯2011年度調査出土資料においても存在する（第1図6）ことが岡田雅彦により指摘された<sup>20)</sup>。「ハ」字状痕跡は、凹面の広端側でのみ確認されること、「ハ」字状痕跡の上に布目痕跡が被っていることから、押印されたものではなく、側板自体に付けられた何らかの痕跡としている。荒池瓦窯2011年度調査地点の製品であることを同定するうえで重要な手がかりになるとみられる。

## 小 結

本稿では、近年相継いで明らかになった新薬師寺金堂創建瓦とそれを造瓦供給したと考えられる荒池瓦窯2011年度調査地点の資料のありかたについて、報告書の観察記述を中心に整理した。新薬師寺は、光明皇后創建のBグループのなかでも創建年次が知られるとともに、その創建所用瓦が判明した例であり、同時期にその製作瓦窯も判明した貴重な事例である。

両者を結ぶ興福寺式6301I-6671Jのありかたは、天平19年(747)という新薬師寺金堂の創建年を反映するように、軒平瓦の顎形態の変換、平瓦粘土板桶巻き技術の残存など、技術史的な編年観として敷衍できる要素とこの系統独自の動きをみせていた。

また、東大寺の造営、あるいはその先行寺院との関係、すなわちCグループとの横の関係も検討課題として浮かび上がってきた。今後の作業としては、Cグループとの関係性も考慮に入れながら、Bグループの中心をなす興福寺のありかたを整理していきたい。

## 注

- 1) 以下の記述は主に、西川新次「新薬師寺の歴史」『大和古寺大観』第4巻 新薬師寺 白毫寺 円成寺、岩波書店、1977、pp.7～21、稲木吉一「新薬師寺」『新薬師寺と白毫寺・円成寺』日本の古寺美術16、保育社、1990、pp.2～114を参考にした。
- 2) 吉川真司「東大寺山堺四至図」『日本古代荘園図』東京大学出版会、1996、pp.555～580
- 3) 奈良教育大学『新薬師寺旧境内-奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書-』2012
- 4) 平城宮・京における軒瓦瓦範の型式番号による(奈良国立文化財研究所『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996他)。以下では、型式・種を省略する。
- 5) 奈良国立文化財研究所『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』(前掲注4)
- 6) 近年、6301 新型式が興福寺東金堂院の調査で出土している(奈良文化財研究所「興福寺東金堂院の調査-第640次」『奈良文化財研究所紀要2022』2022、p.200 図225-4)。
- 7) 細分種を表す大文字アルファベットに対し、小文字アルファベットは瓦範の彫り直しの順を示す。『平城宮出土軒瓦型式一覧〈補遺篇〉』(奈良国立文化財研究所、1984)では、6671Aに彫り直しを認め、6671Aa・6671Abとしたが、『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』(前掲注4)では彫り直しを認めず、Aのみに変更している。
- 8) 吉川真司「東大寺山堺四至図」(前掲注2)
- 9) 荒池瓦窯跡2011年度調査に関わる文献は、以下の通り。
  - ① 渡辺和仁「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡の発掘調査成果と出土瓦」『第12回シンポジウム8世紀の瓦づくりI 大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開』発表要旨、奈良文化財研究所、2012
  - ② 奈良県立橿原考古学研究所(渡辺和仁)「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡」『奈良県遺跡調査概報2011年(第一分冊)』2012、pp.45～68
  - ③ 渡辺和仁「荒池瓦窯跡」『大和を掘る30 2011年度発掘調査速報展』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、2012、p.35
  - ④ 渡辺和仁「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡の発掘調査成果と出土瓦にかかる諸問題」『古代瓦研究VI-大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開- -重圀文系軒瓦の展開-』奈良文化財研究所2014、pp.99～116
- 10) 以下の文献に範傷への言及がある(石田由紀子「平城宮内出土の興福寺式軒瓦」『古代瓦研究VI-大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開- -重圀文系軒瓦の展開-』奈良文化財研究所2014、

- p.71。原田憲二郎「平城京内出土の興福寺式軒瓦」(上掲書) p.82
- 11) 以下の文献に範傷への言及がある(原田憲二郎「平城京内出土の興福寺式軒瓦」(前掲注10)) p.84
  - 12) 島軒満「新薬師寺旧境内出土の軒瓦」『新薬師寺旧境内－奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書－』奈良教育大学, 2012, pp.91～95
  - 13) 渡辺和仁「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡の発掘調査成果と出土瓦」(前掲注9) ①(原注)
  - 14) 毛利光俊彦・花谷浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告XⅢ』奈良国立文化財研究所学報第50冊, 奈良国立文化財研究所, 1991, pp.251～369(原注)
  - 15) 平松良雄「東大寺境内の6301-6671の出土傾向について」『東大寺成立過程の研究』平成10年度～平成11年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究代表者 吉川真司・課題番号10610325), 京都大学, 2001, pp.33～48(原注)
  - 16) 奈良県立橿原考古学研究所(渡辺和仁)「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡」(前掲注9) ②, p.60
  - 17) 吉川真司「東大寺の古層－東大寺丸山西遺跡考－」『南都佛教』第78号, 南都佛教研究会, 2000, pp.1～42。菱田哲郎「東大寺丸山西遺跡出土の瓦について」『南都佛教』第78号, 南都佛教研究会, 2000, pp.43～53(原注)
  - 18) 渡辺和仁「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡の発掘調査成果と出土瓦にかかる諸問題」2014(前掲注9) ④, pp.108・109註(4)
  - 19) 岩永省三「正倉院正倉の奈良時代平瓦をめぐる諸問題」『正倉院紀要』第38号, 宮内庁正倉院事務所, 2016, pp.48～78
  - 20) 岡田雅彦「荒池瓦窯産の瓦を特定するための新資料紹介」『青陵』第151号, 奈良県立橿原考古学研究所, 2017, pp.3～5

## 挿図出典

- 第1図 奈良教育大学『新薬師寺旧境内－奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書－』2012, 第31・32・38図  
岡田雅彦「荒池瓦窯産の瓦を特定するための新資料紹介」『青陵』第151号, 奈良県立橿原考古学研究所, 2017, 図1
- 第2図 奈良県立橿原考古学研究所(渡辺和仁)「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡」『奈良県遺跡調査概報2011年(第一分冊)』2012, 図5・図6

本研究は、JSPS 科研費 JP21K00951 の助成を受けたものです。

